

スポーツを通じた地域活性化に関する研究 ーサーフィンによるライフスタイル移住に焦点を当ててー

スポーツビジネス研究領域

5019A045-8 張 思穎

研究指導教員:木村 和彦 教授

I. はじめに

日本では、地域に人口減少が進む。住民基本台帳人口移動報告書（2016）によると、地方圏から東京圏への転出超過はいまだ年間 10 万人以上の規模で続いている。国土交通白書（2018）によると、地域活性化に向けた取り組みにおいて、東京圏への人口の過度の集中を是正し、それぞれの地域で住みよい環境を確保して、将来にわたって活力ある日本社会を維持していくため、平成 26 年 11 月に「まち・ひと・しごと創生法」に基づき、平成 29 年には「まち・ひと・しごと創生基本方針 2016」の策定及び「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を改訂するなどの取り組みを行ってきた。さらには、総務省（2018）は、地方圏において、地方力の維持を図るためには、地域の育成と確保が大きな課題の一つとなる。近年、若者を中心に、ライフスタイルや働き方の多様化が進んでいると指摘している。ライフスタイル移住(Benson 2009)とは、「経済的な理由や政治的な理由など従来の移住理由以外、広い範囲な意味での生活の質を求めての移住」である。本研究の事例、千葉県の一宮町には、波を求めてのライフスタイル移住の現象があると考えられる。

千葉県一宮町の事例研究を通じて、他のサーフィンのできる海岸がある自治体において、人口増加の側面から地域活性化の参考に知見を得たいと考える。

II. 研究目的

本研究の目的は、スポーツを通じた地域活性化を目的としたサーフィンまちづくりを行っている町を事例研究にし、サーフィンの地域振興政策の実施実態を明らかにする。さらに、サーフィンによるライフスタイル移住者に焦点を当てて、サーフィン移住者の移住要因を明らかにし、移住定着の要因を探ることである。

III. 研究方法

本研究は、2つのインタビュー調査（リサーチ①、リサーチ②）で構成される。リサーチ①では、一宮町のサーフィンに関する政策の実施について、一宮町役場の職員にインタビューを行った。また総務省（2018）の過疎地域への移住者に対するアンケート調査項目に基づき、一宮町の独自の項目を加えた半構造化インタビュー項目を検証し、サーフィン移住者に関する予備調査を行った。（2020年1月26日～27日）リサーチ②では、予備調査の質問項目を修正し、スノーボール・サンプリング調査方法により、予備調査でインタビューしたサーフィン移住者からほかのサーフィン移住者を紹介してもらい、サーフィン移住者の移住要因、移住の定着に関して半構造化インタビューを行うことで、仮説モデルを提示する。

IV. 予備調査(リサーチ I)

サーフィントウンという特徴をもつ千葉県一宮町をより深く理解することと、今後の研究をスムーズに進めるための関係作りとして、筆者とスポーツ経営学を専攻する大学院生（M1、M2 各1名）、スポーツ経営学専攻教員1名で、一宮町にて実地調査を行った。一宮町役場の職員2名（サーフォノミクス事業企画課、オリンピック推進課）に半構造化インタビューを行った。また、一宮町のサーファー移住者2名にも半構造化インタビューを行った。Zhang & Kimura (2020) は、一宮町はスポーツであるサーフィンを通じて、町を活性化させている事が明らかとなった。課題として、資金や土地などの現実的な問題で、サーフストリート構想のお試し住宅やサーフィンセンターの実現ができなかった。最後、一宮町の移住者には、サーフィンを目的としたサーフィン移住者の割合が多いことが明らかになった。

スポーツがきっかけや原因となる移住は、サ

サーフィン関係のものが多かった。また移住後の生活満足度は高くなっていたことが明らかになった。一宮町のサーフィン環境、自然環境、コスト面の良さにも関連性があることがわかった。

V. 本調査(リサーチⅡ)

サーフィン移住者の理解を深めるため、リサーチⅡは調査対象となるサーフィン移住者の数を増やした。サーフィン移住者の移住要因を明らかにし、さらに移住の定着要因の仮説を検証することを目的としている。一宮町で個別インタビューをサーフィン移住者9名に対して実施した。インタビューのデータをKH Coderで分析を行った。(参加者のうちに1人が千葉県いすみ市在住であったため、分析に排除した)

結果は、「レポート」、「サーフィン」、「友人いった」、「通勤の便利さ」、「きっかけ」が移住の要因に関連していることを明らかにした。移住の定着要因について、明確な要因を明らかにすることができなかった。

阪井ほか(2018)は、移住者の実態や移住者と地域の関わりの検討の必要があることを指摘している。そこで、サーフィン移住者の生活実態と地域の関わりを理解するため、「生活満足」、「地域愛着」、「地域交流」、「発展期待」に関連した言葉について考察した。サーフィン移住者が移住してから、高い満足度を示し、特に近所の付き合い、地域の人との繋がりが深くなることより、地域のコミュニティや農業に興味、地域愛着が生まれることがある。地域交流が深まることで、地域愛着に影響を与えることが見られるが、移住の定着(定住意欲)には明確な要因を明らかにすることができなかった。一方、生活に満足していても、ほかの地域に住んでみたい人がいた。ゆえに、ライフスタイル移住とスポーツツーリズムの視点から、サーフィン移住と定着に関する仮説モデルを提示した。移住や移住の定着について、今後の検討と検証が必要となる。

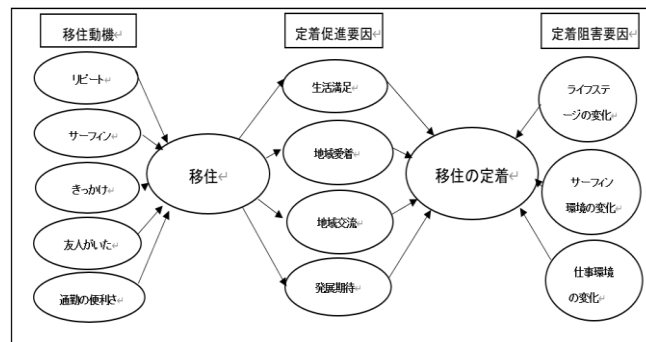


図1. 移住と移住の定着要因の仮説モデル (修正版)

ーライフスタイル移住とスポーツツーリズムの視点からー

VI. まとめ

本研究は、スポーツを通じて、人口増加の可能性が示唆され、政策的な提言を行った。千葉県一宮町の事例研究を通じて、サーフィンによる地域振興政策の実施実態を明らかにし、サーフィン移住者の移住要因について、「レポート」、「サーフィン」、「友人がいた」、「通勤の便利さ」、「きっかけ」が移住の要因に関連していることが明らかになった。さらに、移住と移住の定着要因の仮説モデルを提示した。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究の研究限界は、①調査の参加者が少ないため、KH Coderによる計量的な分析結果の説明力が弱いことが挙げられる。今後、データのサンプリング数を増やす必要があると考えられる。②分析方法の妥当性に、定性的な手法を用いて、KH Coderによるデータ分析結果は、定着要因を明らかにすることができなかったため、定量的な分析による定着要因の再検討の必要があると考える。今後の課題は、千葉県一宮町という東京へのアクセスが良い場所を選択した。ほかの三大都市圏にある以外の地域を検討する必要がある。また、今回は一宮町の行政とサーフィン移住者だけに調査したが、今後、移住者と地域住民の相互関係についての検討も必要であると考えられる。